

棒

平居謙

1

そもそもそいつは、道路から3メートルほど低いところにある川岸に自生したひょろ長い草のようなものに過ぎなかった。ところがある夏、突然勢いを増して伸び始め、その季節の終わりにはいっぱしの並木のような顔をして道路に突き出していたのだ。その時はまだ、雑草と同じような気分でそいつを眺めていた。

2

少し涼しくなったころ突然、市の委嘱業者のような男たちがやって来て川の周辺の草刈りを始めた。私は寝室で草刈りの音を聞いていたが、その木の事などこれぼっちも考えてなどいなかった。次の朝、駅に向かう途中ではっとした。その木が忽然と姿を消していたからである。

3

よく見ると、川岸に1本の棒が刺さっていた。正確にいうと、幹のほんの短い部分だけを残して、あの木の全ての幹の部分も枝の部分も切り払われていた。木というものは往々にして秋になれば葉が落ちて裸になるものだ。だがそいつは裸木というにもあまりにみすぼらしく、ただの棒としてしかすでに存在していないのであった。

4

棒にまでなってしまった以上、おそらくもうそいつが、以前のように青々と茂った姿を見せるということはないだろうと私は考えた。それでそれっきりその木のことを考える機会を失ってしまった。怖ろしく寒い冬が来て、やがて春になり、また蒸し暑い季節が戻ってきた。

5

するとどうだろう。ただの棒にすぎなかったそいつが、全く前と変わらない様子でいつの間にかそこにはいないか。伸びるのを冬の間中忘れていて、それを後悔して取り返そうとしているとしか思われないほどにまで、のびのびと日々を謳歌し始めていたのだ。復活への祝砲。

6

それではじめて、私はそいつと握手した。それ以来、毎日朝晩、「また伸びたねえ」などとそいつに言葉をかけるようになった。日によってそれぞれの枝の伸び具合が異なる。一番伸びた枝に、ご褒美を与えるように、固い握手を交わすのだ。

7

樹冠に茂る樹々の葉に直接触れることは、よほどの低木でないかぎり滅多にないだろう。しかしある独特の地形の偶然から、私は毎朝、日に日に伸びて道路のほうにまではみ出てこようとしているほどに勢いのある1本の木の枝々と握手を交わして出勤する。

8

そいつがもう一度棒に戻るといったような場合、私はどんな言葉をかければよいのだろうか。それが私の必ず毎日欠かさず考えていることの一つである。